

大好きだった山本さんの死を悼む

1972 年から 74 年までの山行を纏めた「大宮労山年報 No 1」がある。ガリ版摺の 100 ページ近いもので、その巻頭で山本さんが「われら大宮労山」を書いている。事務局長として、作成の中心だったのだろう。山本さんの大宮労山入会は年報発行の 3 年程前とのことで会創立後 5 年程経過している。同じ職場にいた番場宏明さん（当時の全国連盟会長、ビッグホワイトピークを目指した日本の第 2 次ヒマラヤ遠征隊隊員）の誘いだったという。その巻頭文の中で、後から会に合流した自分たちのことを「技術はそれほどではないのに、ヤヤ山ずれしており、ヤヤましな、そしてヤヤ理屈っぽく小うるさい一派」と書いている。会員の多くが、県連や全国連盟の役員として活躍する中、その頃の山本さんは会運営の中心だったと思う。中ア縦走合宿など多くの山行に山本さんの名がある。

私との出会いはその 5 年後、40 年近く前になる。大宮労山への入会の説明をして頂いた時だ。それ以来、岩登り、沢登り、雪山、全て山本さんに教えて頂いた。埼玉と群馬の冬の県境、爺が岳の白沢天狗尾根など、人の行かない山やルートの魅力も教えてもらった。山への交通手段の多くはタウンエース。当時、ワゴン車は貨物用が多く、乗用にはあまり使われなかった。でも、大勢乗れて、安く行けるといって、率先して購入し仲間を山に連れだした。山も面白かったし、車の中の会話も面白かった。山本さんの教え子で前会長の故徳重さんも、北から南まで車を走らせ、会の隆盛を築いたが、徳重さんの行動には、いつも山本さんを意識したところがあった。山本さんには、傍のみんなを魅了してしまう力があつた。

そのころ、山本さんは県連の理事長だったと思う。県連の登山祭典、小川山の麓の廻り目平で、山の歌のリードをしながら、右手は 4 拍子、左手は 3 拍子で動かしていた。当時は無名だった小川山、今は岩登りのメッカみたいになっている。ワゴン車の乗用利用（今は常識）もそうだが、山本さんには流行の最先端のさらに先を行く先見性もあつた。それがみんなを魅了する力だった。

やがて、全国連盟の理事長に就任された。20 年程前、労山創立 30 周年記念で、ドイツの登山家を招いて講演会があつた。主催者の挨拶は山本さん。必要なことはすべて、不要なことは一切なし、しかも制限時間ぴったりの素晴らしさだった。聞けば、会長の吉尾さん（？）が挨拶の予定だったのに、急きょ来られず、とっさの交代で話したとのこと、2 度びっくりだった。理事長を退いた後も、遭難対策基金（現新特別基金）の管理委員として、労山全体に多大な尽力をされた。

その頃、癌が見つかり、会うことが少なくなった。近年は、県内各地に生まれた 9 条の会の横のつながりに努力しているとのことだった。儀礼は嫌いだといって年賀状

を書かなかった山本さんから年賀状が来るようになったのはこの頃からだ。今年頂いた年賀状には、「後期高齢者！として初の正月を迎えました」とある。嬉しいことなのかと訝ったのだが、病魔に打ち勝ったぞというメッセージなのだとわかり、まだまだ元気な姿にお会いできると思っていたのだが。

奥さん、息子さん、娘さんに見守られての安らかな最後だったと、立ち会った嘗て私の教え子だった看護師から聞いた。お別れの会は、ごく内輪でとの本人、遺族の意向にも拘らず、会場定員 70 名の 2 倍以上の人が献花に訪れ、別れを惜しんだ。みんな山本さんに魅了された人たちだった。

大好きだった山本さん、本当にお世話になりました。安らかに眠りください。

大宮勤労者山岳会会長　○野　和夫



会員の山本辰平さんが7月1日に亡くられました。

山本さんは、1970 年ころ大宮労山に入会されました。事務局長、会長などを務められ、1980 年ころの数年は埼玉県連理事長、1990 年ころの数年は全国連盟理事長を務められました。その後の数年は副会長や遭難対策基金（現在の新特別基金）の管理委員なども務められ、労山の活動に貢献、ご尽力されました。

ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。